

## 審査の結果の要旨

氏名 田口 良子

本研究は、乳がん検診制度改正後の経過期間が短く、人々に十分認知されていないことが報告されているマンモグラフィ検診について、検診受診対象者がマンモグラフィ検診に関するどのような属性（要因）を潜在的に評価しているかの傾向を探るため、一般住民女性を対象とした質問紙調査を実施した。その際、日本の現状ではマンモグラフィ検診に関する情報が浸透していないと考えられることから、実際の行動データを集めるには限界がある。そこで、仮想的なシナリオに対する回答から検診への選好データを集めることが可能である表明選好法の一つである選択型実験を使用した。主な結果は以下の通りである。

1. 今回の調査で検討された全ての属性について、検診の効用への有意で妥当な符号の影響が明らかとなり、対象者は検診提供側が検診の主要な目的としている「死亡率減少効果」のような健康アウトカム以外にも、検査自体の感度を表す「検診で乳がんが見逃される可能性」、検診プロセスに関わる「検診を受けるためにかかる合計時間」、「検診を受けるためにかかる合計費用」、対象者の主観的な要素である「乳房の痛みの程度」といった属性をも高く評価していた。
2. 分析で推定された「費用」以外の係数を、それぞれ「費用」の係数で割ることによって算出される限界支払い意思額は、『待ち時間が1時間短縮すること』に対して2,187円、『乳房の強い痛みが軽減されて軽い痛みになること』に対して6,305円、『検診で乳がんが見逃される可能性が10%減少すること』に対して6,630円、『乳がんによる死亡を減少させる効果が10%増加すること』に対して3,563円であり、検診を構成するそれぞれの属性の水準の変化に対し、低からぬ評価をしていた。

3. マンモグラフィ検診受診経験の有無によるサブサンプル別のモデルの推定結果から、検診経験者は検診非経験者と比較して検診を高く評価している傾向が見られ、行動と選好のプラスの相関が確認されたことから表明選好法の妥当性が示唆された。
4. 今後需要のあると考えられる検診オプションについて、検診を受けるためにかかる合計時間と価格を組み合わせる想定して選択行動を予測したところ、検診を受けるためにかかる合計時間が短い検診は、たとえそれが高い費用で提供されたとしてもある程度の割合の需要があることが示唆され、検診の評価の際には検診を受けるためにかかる時間は重要性の高い項目であると考えられた。

以上、本論文はマンモグラフィ検診を構成する各属性への評価の傾向や属性間のトレードオフの比率を明らかにした。また、検診に関する人々の選好の情報を集める手段としての表明選好法の妥当性が示唆された。

日本の現状ではマンモグラフィ検診に関して利用できる市場の情報に限界があるが、表明選好法を用いて仮想的にマンモグラフィ検診の評価に関するデータを収集し分析したこと、また一般住民のランダムサンプルを対象にしてマンモグラフィ検診の選好を選択型実験により検討した研究は検索の限り見あたらず、数少ない報告の一つであるという点で、学位の授与に値するものと考えられる。